

今年で開催3回目となったスペースシャワーTV主催イベント
「SPRING BREEZE 2018」が終演！
 心地よい春の日比谷野音にベストマッチな6組がライブを披露
くるり / 竹原ピストル / CHAI / ペトロールズ / MONO NO AWARE / LUCKY TAPES

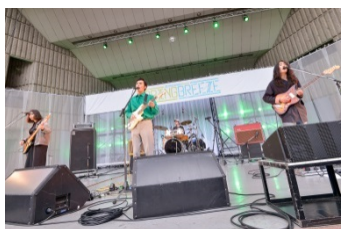


Photo by 古溪一道

日本最大の音楽専門チャンネル「スペースシャワーTV」は、4月15日(日)に日比谷野外大音楽堂にて春のオムニバスライブ「SPRING BREEZE 2018」を開催いたしました。

春の心地よい風が吹き抜ける日比谷野音で、くるり / 竹原ピストル / CHAI / ペトロールズ / MONO NO AWARE / LUCKY TAPESという豪華アーティスト6組がライブを披露いたしました。

つきましては、チケットがSOLD OUTした貴重な1日の模様をライブレポート・ライブ写真素材でお送りいたします。是非、貴媒体で取上げていただけますと幸いです。ご検討の程、何卒宜しくお願いいたします。

<イベント開催概要>

SPACE SHOWER TV Presents SPRING BREEZE 2018

- 日時：4月15日(日) OPEN 13:30 START 14:30
- 会場：日比谷野外大音楽堂
- 出演：くるり / 竹原ピストル / CHAI / ペトロールズ / MONO NO AWARE / LUCKY TAPES
- イベント公式サイト：<http://www.spaceshowertv.com/springbreeze>
- Twitterアカウント：@SB_SSTV
- 主催：SPACE SHOWER NETWORKS
- 協賛：ファミリーマート
- 制作協力・運営：DISK GARAGE

「SPRING BREEZE 2018」の模様をスペースシャワーTVでオンエア！

放送日時：6/3(日)23:00~24:00 (ほか)

視聴方法：<http://sstv.jp/howto>

<本件に関するお問い合わせ先>

株式会社スペースシャワーネットワーク コンテンツマーケティング部
 TEL：03-3585-3544 FAX：03-3585-3215

<ライブレポート>

今回で3回目となるスペースシャワーTVが主催するライブイベント「SPACE SHOWER TV Presents SPRING BREEZE 2018」が、4月15日に日比谷野外大音楽堂にて開催された。今回ラインナップされた出演者は、くり、竹原ピストル、CHAI、ペトロールズ、MONO NO AWARE、LUCKY TAPESの6組。それぞれが独創的な音楽表現を追求しているバラエティに富んだバンド／歌うたいの貴重な共演は、イベントの開催発表時から大きな注目を集め、チケットはソールドアウト。開演前から自由なスタイルで音楽を楽しもうとするオーディエンスたちが発するとともにいいムードが会場に流れていた。また当日の早朝まで嵐が吹き荒れていたが、雨は昼ごろには止み、イベントタイトルを象徴するように快適な春風を浴びられるなかで、トップバッターを務めたMONO NO AWAREのライブがスタートした。

浮遊感に満ちたまどろんだサウンドスケープを現出させた1曲目の「me to me」の後半に雲間から陽光が差し込む。そんなドラマティックな状況も味方につけた彼らは、2曲目の「井戸育ち」で熱量の高いプレイをドライブさせていった。新曲「東京」は、ラテンやファンク、あるいはサビの童謡然としたメロディなど様々な要素を併せ持った構造を持ちつつもシンプルな聴き応えを誇っており、バンドの進化を如実に感じさせるものだった。

2番手に登場したのは、“ニューエキサイトオンナバンド”を標榜するCHAI。「Sound & Stomach」から始まった彼女たちのライブは、ファンクやニューウェイヴを独自のクリエイティビティをもって自分たちのものにした音楽性の魅力を、確かな演奏力とキュートなパフォーマンス力で浮き彫りにする見事な内容だった。自己紹介や1stフルアルバム『PINK』の宣伝もエンターテインメント化してみせ、初見のオーディエンスも楽しく巻き込む。CHAIの“NEOかわいい精神”をUSインディに通じるサウンドプロダクションでメロウに表現した「アイム・ミー」と「sayonara complex」を鳴らし終えると、4人は忘れがたい余韻を残してステージを去っていった。

3番手のLUCKY TAPESは、3管のホーンセクションを含む総勢9人の編成でステージに登場。「intro」を経て鳴らされた「レイディ・ブルース」から、管楽器がいることの強みを存分に活かし、洗練されたポップソングの魅力を会場に浸透させていった。アンサンブルの様相は軽快な気持ちよさを押し出すだけでなく、絶妙な緩急をつけながらときにソリッドなアプローチを見せ、ときにジャジーにスウィングする。特にラスト2曲の「Gravity」や「シエリー」はもはやクラシックな佇まいを放っていた。

夕暮れ時の4番手に登場したのは、この唯一のソロアーティストにして、唯一の弾き語りのライブアクトである竹原ピストル。彼は「今日は仲間に入れていただいてありがとうございます。竹原ピストルと言います」と口にしてから、テレビCMで多くの人が耳にしたことがあるであろう1曲目「よー、そこの若いの」を歌い始めた。竹原はあくまで会場にいるすべての人と1対1で向き合い、まさに“1曲入魂”といったスタイルで、次々と彼の歌うたいとしての生き様をダイレクトに投影した歌を紡いでいった。全11曲を歌い終えると、オーディエンスから大きな拍手と歓声が湧き上がった。

5番手のくりがステージに登場したころにはすっかり陽が落ち、会場は少しの肌寒さを覚えながらもそれを心地よく感じる“夜の野音”ならではの情感に包まれていた。まずは岸田繁、佐藤征史、ファンファンの3人がドラムレスの状態で「プレーメン」を威風堂々と奏で、そこからギターとキーボード、ドラムのサポートメンバーが加わった編成で「ハイウェイ」へと繋げていった。そのサウンドはオーガニックな感触がある一方で、刺激的なグルーブが通奏低音のように流れていて、歌はどこまでも力強く躍動していく。度肝を抜かれたのはインストゥルメンタルの新曲「東京オリンピック」で、プログレを彷彿させる複雑な構成によって築き上げられたこの曲は、ロックからブラックミュージック、クラシックまであらゆる音楽のメソッドを昇華してきたくりだけが形象化できる総合音楽的なすごみを、まざまざと提示していた。

トリを飾ったのは、ペトロールズ。チャーミングなコーラスワークが印象的な1曲目「シェイプ」を皮切りに、3ピースバンドならではの音の隙間の妙趣を体現すると同時に、3ピースとは思えない奥行きに彩られた音楽力でオーディエンスの身体を揺らしていき。ジャンル記号性にとらわれない底知れぬ色気を帯びたグルーブをじっくり高めていった「闖入者」と「インサイダー」、「not in service」。静と動を行き来するアンサンブルのカタルシスがたまらない「ホロウェイ」。ペトロールズ流の深淵なラブソング表現が極まった「Tallasa」と本編ラストの「KA・MO・NE」まで、徹頭徹尾、名演と呼ぶにふさわしいパフォーマンスを見せてくれた。そして、アンコールに応じて披露した彼らの代表曲の1つである「雨」によって、「SPRING BREEZE 2018」はまさに大団円を迎えた。

なお、この日のライブの様子は、6月3日23時よりスペースシャワーTVで特別番組として放送予定なのでお見逃しなく。

(取材・文＝三宅正一／撮影＝古溪一道)

<セットリスト> ※出演順

MONO NO AWARE

M1. me to me / M2. 井戸育ち / M3. マンマミーヤ！ / M4. 東京 / M5. イワンコッチャナイ / M6. 駆け落ち

CHAI

M1. Sound & Stomach / M2. ボーイズ・セコ・メン / M3. 自己紹介 / M4. N.E.O. / M5. ぎゃらんぶー / M6. アイム・ミー / M7. sayonara complex

LUCKY TAPES

M1. intro / M2. レイディ・ブルース / M3. 体温 / M4. NUDE / M5. Balance / M6. Gravity / M7. シエリー

竹原ピストル

M1. よー、そこの若いの / M2. LIVE IN 和歌山 / M3. みんな～、やってるか！ / M4. ぼくは限りない～one for the show～ / M5. Forever Young / M6. 俺のアディダス / M7. ちえっく！ / M8. Its my life!! / M9. 隠岐手紙 / M10. Amazing grace / M11. 狼煙

くり

M1. プレーメン / M2. ハイウェイ / M3. ハイネケン / M4. 東京オリンピック / M5. 琥珀色の街、上海蟹の朝

ペトロールズ

M1. シェイプ / M2. 闖入者 / M3. インサイダー / M4. not in service / M5. ホロウェイ / M6. Talassa / M7. KA・MO・NE
EN. 雨

<本件に関するお問い合わせ先>

株式会社スペースシャワーネットワーク コンテンツマーケティング部

TEL：03-3585-3544 FAX：03-3585-3215